

令和4年度 京都府立農芸高等学校 学校経営計画（スクールマネジメントプラン） 実施段階

学校経営方針(中期経営目標)	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)		
<p>1 目指す教育 質実剛健の校訓のもと、高等学校における普通教育と農業に関する専門教育を施すことにより、社会人基礎力を養い、農業教育で培った知識・技術を活かし、生命の尊厳を尊び、農業の発展及び環境保全に貢献する意識と実行力を備えた、社会の発展に寄与する人材を育成する。</p> <p>2 目指す学校 京都府農業教育の唯一の専門高校として、地域や関係諸機関等に信頼される学校づくりを基本とし、 (1)社会から求められる人材を育成する学校 (2)農業や農業に関連する分野で活躍する職業人を育成する学校 (3)農業専門高校にふさわしい高度な専門性を追求する学校を目指す。</p> <p>3 目指す生徒 (1)夢と希望を持ち、自ら考え行動する生徒 「主体的に学び考える力」 (2)自他の生命を尊び、社会でつながる生徒 「多様な人とつながる力」 (3)質実剛健の風風を培い、挑戦し続ける生徒 「新たな価値を生み出す力」</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>評価 A 十分達成できている。(目標以上の成果が得られた) B ほぼ達成できている。(ほぼ目標どおりの成果が得られた。) C 達成できているとはいえない。(成果はあったが目標には達していない。) D ほとんど達成できていない。(ほとんど成果がなかった。)</p> </div>	<p>1 成果 (1)「新しい生活様式」の定着とともに生徒密着型・問題解決型の生徒指導により、概ね落ち着いた学校生活と寮生活を保つとともに、主体的・対話的で深い学びと基礎・基本の定着を軸とする学力向上の取組みと計画的な進路指導による希望進路の実現に向けた取組みを進めた。 (2)専門的な知識・技術を活かした地域での活動、グローバルGAP継続認証、農芸マルシェなど農業専門高校として特色ある活動を積極的に進めるとともに、農業クラブ活動や京都府立大学をはじめとする関係機関等との連携活動などに取組んだ。 (3)農業の6次産業化、スマート農業技術の導入、グローバル化を軸とする3学科8コースの専門教育体制と産業教育デジタル化事業等による農場施設・設備の整備に加え新学習指導要領実施に伴う評価規準やBYOD導入の準備を推進した (4)生徒の姿による教育成果の発信・広報と学校運営協議会や保護者対象の学校アンケートによる教育ニーズの受信に努めるとともに、次年度の創立40周年記念事業への準備を進めた。</p> <p>2 課題 (1)生徒に適正な規範意識と帰属意識の育成と学習習慣の定着によって、より高い志を持たせ、希望進路実現に努力させるとともに、生涯にわたって社会に貢献できる人材に成長させること。 (2)地元地域や中学校との適切な連携や教育活動の成果・魅力を発信することによって教育機関としての信頼をさらに高め、募集定員を充足する志願者を確保すること。 (3)自主的な課外活動を推奨し、部活動、農業クラブ専門部の適切な指導による活性化と、生徒にとってより魅力的で安心・安全な教育実践に努めること。 (4)大学・企業・関係機関と連携した取組や府農林水産部、地元行政機関の事業を活用した農業の担い手育成に関わる活動を引き続き、継続・実施すること。</p>	<p>1 学校経営主題 「創立40周年 農芸の新しい歴史を刻め・目指せ Next Stage!!」 2 学校経営の重点事項 (1)「教科・科目の基礎・基本の定着と主体的・対話的で深い学びの実践」 ①1年生BYODによるタブレット端末導入を踏まえ、全ての授業・実習におけるICTの積極的活用と指導方法の工夫・改善による基礎的・基本的な事項の確実な定着ならびに主体的・対話的で深い学びの実践により学力向上を目指す。 ②授業改善のための生徒による授業アンケートを実施・検証を積極的にを行うとともに、各教科・学科・コースにおいて適切な評価基準を整備し、観点別評価による評価・評定を適切に行う。 ③農業専門科目と普通教科・科目との横断的な活動に取組むことにより、学科のねらいやコースの目指す生徒像の具現化を学校全体で取り組む。 (2)「農業専門高校として特色ある活動の実践・充実と自己肯定感の涵養」 ①各学科・コースの特色に応じて「6次産業化」、「スマート農業技術」、「グローバル化」を教育活動に積極的に組み入れ、ACCESSを軸とする実践的で体験的な農業教育を推進し、生徒の自己肯定感の涵養に資する。 ②京都府立大学生命環境学部との連携協定に基づき、連携活動を一層推進するとともに、より高いレベルでの連携の在り方を研究し、京都府立大学と本校との独自の農業専門教育モデルの構築に取り組む。 ③府農林水産部、関係機関との連携による各種事業を積極的に活用し、京都府の農業や関連産業の振興・発展に寄与する将来の担い手育成に積極的に取り組む。 (3)「計画的なキャリア教育による個性・能力に応じた希望進路の実現」 ①3年間を見通した進路ガイダンス、インターンシップ、積極的な資格取得等により、適正な職業観・勤労観とともに、社会に貢献する意識を計画的に育成する。 ②地域、企業、大学等と連携し、外部人材を積極的に活用するなど将来の職業人としての倫理観・マナー並びに社会人基礎力を培う。 ③府農林水産部、関係機関との連携による各種事業を積極的に活用し、京都府の農業や関連産業の振興・発展に寄与する将来の担い手育成に取り組む (4)「組織的な生活指導と豊かな人間性の育成」 ①保護者の理解と関係機関との連携を基盤に、全ての教育活動を通して生徒密着型・問題解決型の生活指導を組織的に推進し、安定し、充実した学校生活、寮生活を送らせる。 ②学校生活、寮生活及び部活動を軸とする課外活動をおとして適切な倫理観と行動規範を定着させ、自立心、協調性、責任感並びに道徳的実践力を育てるなど豊かな人間性の育む取組みを推進する。 (5)「あらゆる教育活動をおとした人権教育の推進と安心・安全の確保」 ①感染症拡大防止に係る「新しい行動様式・生活様式」を定着させ、自他の人権と生命を大切に、良識を持って共生社会を主体的に生きる力を醸成する。 ②特別な支援を要する生徒の教育ニーズを把握し、関係機関と適切に連携することにより、組織的に合理的配慮を提供するなど、特別支援教育を推進する。 ③全ての教育活動における安全の確保を最優先とし、組織的に事故等の未然防止に努める。 (6)「地域から信頼される開かれた学校づくりの推進」 ①日頃の学習成果発表の機会を積極的に設定し、生徒の姿で教育実践を発表することにより、広く教育成果を示し、教育機関としての一層の信頼を得る。 ②教育後援会、船岡同窓会、PTAと一体となり、創立40周年記念事業の取組みを進め、記念誌発行、記念式典をはじめとする創立記念事業を成功させる。 ③新聞広報、南丹市CATVなどへの教育情報の積極的な発信と学校運営協議会、保護者アンケート等による教育ニーズの受信に努めるとともに、中学校との適切な連携により定員を充足する志願者を確保する。</p>		
分掌／教科名	評価領域 (業務領域)	重点目標	評価	成果と課題
管理職	組織運営	<p>教科・科目の基礎・基本の定着と主体的・対話的で深い学びの実践</p> <p>農業専門高校として特色ある活動の実践・充実</p> <p>地域から信頼される開かれた学校づくりの推進</p>	B	<p>・タブレットの導入、観点別評価の実施初年度であった。今後、より一層定着するよう研修会等の実施が必要である。</p> <p>・授業アンケートの項目や集計方法などの実施内容を見直したものの、実施率が低迷している。今後の授業改善に活かせるよう実施方法を改善したい。</p> <p>・学科目標に沿った各コースの取組が推進され、地域・大学・企業と連携した取組が活発に実施された。今後もACCESSの理念の実現に向けた教育活動の推進が必要である。</p> <p>・小学生の校外学習や農芸祭等を実施することで、生徒の姿を発信することができた。今後も各コースの学習内容を体験的に小中学生にPRできる取組が必要となる。</p> <p>・志願者確保に向けた生徒募集活動をより充実させる必要がある。</p> <p>・関係団体、各分掌と連携し創立40周年式典を無事挙行できた。また、生徒支援策の検討を行うことができた。</p>
事務部	学習環境	<p>就学支援金をはじめとする就学支援制度の周知徹底</p> <p>学校予算の効果的な執行</p>	B	<p>・就学支援制度は、担任と連携して周知し、速やかな回収に努めた。回収が困難なケースについても担任と丁寧に関連しながら、手続きを進めている。</p> <p>・光熱水費や飼料代の高騰に伴い、効率的な予算執行は大変難しかったが、農場とも連携して補正予算を実現することが出来た。</p> <p>・施設設備の老朽化対策も管理課と連携して進め、空調の緊急工事、特別教室への新設を行った。</p> <p>・事務部内での各担当が連携し、情報共有しながら処理を進めることが出来た。</p>
教務部	学習指導	<p>効果的な教育活動ができる学習環境の整備</p> <p>学科改編及び観点別評価・BYODに伴う指導方法の改善促進</p>	B	<p>・BYOD実施に伴う情報発信と環境整備に取り組めたが、活用面においてますますのサポートや情報共有の場が必要である。</p> <p>・観点別評価は大きな問題はなく実施出来たものの、この評価を生徒や授業に還元する方法を模索することなど、運用面における検討を進める必要がある。</p> <p>・学校の情報発信ではHPのレイアウト変更や中学校へのアプローチに、他分掌の先生方の力も借りながら取り組むことができた。今後はさらに広く、農芸高校の情報を発信していく方法について挑戦していく必要がある。</p> <p>・口丹地域では進路指導主事の訪問を重点的に行うことが出来たが、生徒募集に直接的に繋がるアプローチが必要である。</p> <p>・新しい学びに向けた柔軟な教育課程や、農芸高校らしい学びのあり方について教職員間での共有と検討が必要である。</p>
生徒指導部	生徒指導	<p>組織的な生活指導と豊かな人間性の育成</p> <p>いじめ等の問題行動の未然防止</p> <p>生徒会活動と部活動の充実を図る</p>	B	<p>・昨年度の生徒間暴力の比較増減では、同時期より1件減少したものの、その他の問題行動が3件増加した。</p> <p>・生徒指導については、分掌間の連携を強化して面談や事後指導の工夫が行えた。今後も密着した生活指導から生徒規範意識の醸成と社会人基礎力の育成に努めたい。課題としては、校内や公共交通機関のマナーが悪く、規範意識そのものを理解できていない生徒が一部みられた。個の生徒に応じた効果的な指導の在り方については、今後も検討を積み重ねていく必要がある。</p> <p>・9月現在、部活動加入率は82.0%を維持している。昨年度から1%減少した。ただ、年度末には活動実態が低下している部活動もあるため、持続的な活動水準にまで引き上げることが必要である。</p> <p>・6月と10月のそれぞれ1週間、人権週間を実施し、生徒会と連携して人権意識を高める取り組みができた。</p>
進路指導部	進路指導	<p>キャリア教育の推進</p> <p>学力の向上</p> <p>社会人基礎力の育成</p> <p>Classiの機能を更に活用し、保護者連携や生徒の指導に役立てる。</p>	B	<p>・農業土木コース2年生による、5社に協力をいただき、インターンシップを実施した。</p> <p>・放課後実施の進学セミナーを、長期休業中の集中講義型に変更した。今後は、学年団とも連携し、参加人数を増やすことが課題である。</p> <p>・大学生教育ボランティアは積極的に活用できた。今後は、学年団とも連携し、参加人数を増やすことが課題である。</p> <p>・学習合宿は前期は実施できたものの、後期は希望者がなく、中止となった。今後は、学年団とも連携し、参加人数を増やすことが課題である。</p> <p>・分野別説明会において、南丹広域振興局と連携し、実際の企業担当者や生徒が話す機会を設けることができた。</p> <p>・classiは連絡機能の活用は定着してきた。今後は学習機能の活用を検討したい。</p>
保健部	健康安全教育 特別支援教育 校内美化安全点検	<p>自分の身体に関心を持ち、感染症予防などを含めた健康を意識する生徒を育成する。</p> <p>特別支援教育の充実をはかる。</p> <p>よりよい学習環境の維持と向上を目指す。</p>	B	<p>・感染症拡大防止のための健康観察や手指消毒の励行を1年間行うことができた。</p> <p>・校内一斉美化作業や日々の清掃活動を通して校内美化の指導を行うことができた。</p> <p>・特別支援教育会議を年間を通して計画的に開催し、生徒の情報共有をはかることができた。また、教職員研修を通して発達に課題のある生徒に対するICT活用について学ぶことができた。</p> <p>・感染症に関するマスク着用等の緩和について、校内での指導基準を改めて引き直す必要がある。</p> <p>・校内一斉美化作業の実施日時や作業時間について精査する必要がある。</p> <p>・トイレの備品等使用状況が悪かったものに関して、引き続き生徒に対する啓発を続けなければならない。</p>

農場部	農場管理運営	実践的で体験的な農業教育の推進	学科・事務部と連携し、必要な経費の確保に努め、より実践的な実験・実習を展開する。 「6次産業化」、「スマート農業技術」、「グローバル化」を学習内容に組み入れ、最先端農業を実践的に学ばせる。 安全衛生教育の観点から、実験・実習時の事故防止を徹底する。	B B B	B	(成果) ・昨年度までに整備された施設・設備を十分に活用し、最先端農業を実践的に学ばせることができた。 ・農業クラブ全国大会にプロジェクト発表2分野で初出場でき、農業鑑定競技会で1名が優秀賞に入賞できた。 ・農芸祭を実施し、約1,600名が来場された。学習成果発表会も実施できた。 ・京都府立大学生命環境学部と連携した教育活動で、結果や成果が出てきている。 ・新たな水耕栽培システムでトマト・メロンのGlobal G.A.P.認証取得ができた。
	農業クラブ活動	農業クラブ活動の活性化	各種発表会・競技会において、府連大会、全国大会での入賞を目指した指導を行う。 日頃の学習成果発表の場として、農芸祭、学習成果発表会を成功させる。	A A	A	・採卵鶏での農場HACCP認証が取得できた。 (課題) ・輸入資材高騰の影響を受け、実験実習費が不足し、十分な教育活動が実施できない学科・コースが見られた。 ・昨年度までに更新されなかった農業機械、施設・設備の更新が必要である。
	担い手育成	関係機関と連携した担い手育成の推進	京都府立大学生命環境学部との連携協定を具体化する取組みを一層推進する。 府立高校特色化事業や京都府関係機関各種事業を活用し、将来の地域農業の担い手を育成する。	B B	B	・どのコースも全国レベルで発表できる程度のプロジェクト学習を展開し、さらに農業クラブ活動を活性化する。 ・観点別評価への対応、タブレット端末の活用などさらに研究や研修が必要である。 ・京の担い手育成推進事業が本年度で終了するため、スマート農業に関する予算確保が課題となる。
寮務部	寮教育寮運営	寮生活と学習を密着させ、学習習慣を定着することによって学力向上を図る。また、これによって自己有用感の高揚ならびに自己実現に向けて努力する態度を育成する。	学習時間を活用し、学習習慣の定着を図るとともに、学習に対する主体性を育成する。 寮面談や日常でのコミュニケーションを通じて生徒の悩みに耳を傾け、個々の生徒の実態を把握し、共に考えることで人としての生き方や在り方を深く考えさせ、精神的な成長を促す。	B B	B	(成果) ・1寮生は各教科からの課題、2寮生は自主学習課題に取り組み、学習習慣の定着を図ることができた。 ・定期的な寮面談を行い、その結果を情報共有することで日々の指導に活かすことができた。 ・食事の黙食、浴室入浴人数の制限、他室訪問禁止など寮生には窮屈な場面が多く、我慢を求めることは多くあったが、それらの措置により、集団感染を一定防ぐことができた。
		厳しくも暖かく、きめ細やかな生活指導により、社会人としてふさわしい生活習慣の確立と規範意識の醸成を図る。	自発的なあいさつと生活規則の遵守を定着させることで規範意識の確立を図り、社会性を身につけさせて、社会人基礎力を育成する。また、寮生集会や寮行事を通じて寮生の結束と農芸高校への帰属意識を高める。	B	B	(課題) ・寮行事については、規模縮小を余儀なくされ、本来取り組みたかった寮教育を進められなかった。 ・年度当初に特別指導によって、退寮者が続出し、コロナ禍も影響した関係で、2寮生の退寮者が例年よりも多かった。2寮生としての自覚と責任をもっと養わなければならなかった。
		新型コロナウイルス感染防止対策を徹底させる。	マスク着用・密の回避・大声での会話防止などを徹底させ、集団感染を防ぐとともに、個々の健康管理について意識を高く持たせる。	B	B	
第1学年部	指導方針	生徒に適正な規範意識を持たせ、教科担当者が授業しやすい雰囲気を作る。	適正な規範意識を持たせるために、SHRやLHRで丁寧な挨拶や礼儀作法を常に心がけるとともに、学年全体で意識させる。すべての教育活動で人権意識や規範意識の醸成を図るために、生徒一人一人の言動や行動についてのアンテナを高く持つ。	B	B	(成果) ・保護者との連携を密にとり、様々な課題を抱える生徒の理解に努め、問題解決に向けて取り組んだ。 ・考査前7限目を実施して、多くの生徒で学習をする習慣づけすることができた。
		10月からの適切なコース選択ができるように、他の分掌・各コースと密な連携をする。	農芸高校の要である。コース選択を適切に行うために個人面談や生徒対象アンケート、日々の会話から生徒の希望コースを積極的に確認し、意図しないコース選択が生じないようにする。	B	B	・SHRやLHRで丁寧な挨拶や礼儀作法を常に心がけるとともに、学年全体の集団を意識させることで落ち着いた学習環境を確保することができた。 ・コース選択については、生徒本人と保護者と面談を重ねることで各コース選択については十分な理解が得られた。
		保護者との連携を密にし、進路指導面や生徒指導面で理解を得る。	保護者との連携を密にするために、男子は帰省用紙および女子は週末帰省用紙を確認し、必要に応じて保護者連絡を行う。また、生徒が活動している様子を積極的に発信するためにあらゆるツールを効果的に活用する。	B	B	(課題) ・BYOD端末の使用に関して、充電忘れや端末の忘れ物が多くあった。学年としてこれらの問題解決策を考える必要性を感じた。来年度以降に向けて、BYOD端末の更なる利活用に向けた取り組みを加速化させる必要性を感じた。
		自主的な学習習慣の定着を目指す。	中学校までに十分な学習習慣が定着していないことが予想されるため、考査前に7限目を実施し、学習する癖付けを行う。各学期に教科担当者会議を実施し、教科横断的な情報共有を行い、不振科目の早期発見に努める。	C	C	
第2学年部	指導方針	生徒が自主的・自立的に学びを深めようとする姿勢を育成する。	学科会議へ各担任が出席することで、2学年での学習の主軸となるコースでの学習が円滑に行えるよう努める。定期的に教科担当者会議を実施し、生徒の学習状況を全体で共有し、生徒の課題把握に努め、早期のケアを行い成績不振の防止に努める。	C	C	(成果) ・生徒あるいは保護者とのつながりを密にしなが、生徒の実態把握、問題解決等に役立てることができた。 ・トラブル等に対して、各担任が早期に対応し、問題解決に努めることができた。 ・修学旅行に関しては行程の大きな変更もあったが、関係機関と連携を取りながら準備を進め、大きなトラブルも無く充実した取り組みを進めることができた。
		規範意識を持ち、他を配慮した行動ができるような人間性を育成する。	生徒と生徒を取り巻く環境に対してアンテナ感度を高くし、変化を敏感に察知することで、生徒の指導に役立て、指導案件を未然に防止する。適切な場面で保護者と連絡を取り合いながら、問題事象の早期発見・解決に努め、家庭と同一歩調で生徒の教育を行えるよう努める。	B	B	(課題) ・生徒に規範意識を持たせることに課題が残る。それとともに生徒間の関わりに関して、他者のことを考えながら自身が行動できるよう働きかけを進める必要がある。 ・来年度の進路決定に向けて、生徒ひとりひとりが自身の適性を見極め進路探求を進めていくよう、学年団あるいは各分掌と連携しながら生徒を導いていく必要がある。
		生徒と教員が同じベクトルで教育活動へ迎えるような関係作りを進める。	3年次での進路選択にスムーズにつなげていくために、進路指導部と連携して生徒が進路に対する展望を持ち、主体的に探求を進めることができるよう取り組みを進める。生徒の実態に応じて、資格取得、課外活動への参加、模試の受験を勧奨し、進路選択の幅を広げるよう努める。	B	B	・教科担当者会議を持つことができなかった。一方、各教科担当者がそれぞれ多くの業務を行う中で、一同が集まる場面を設定することは難しく、合理性を欠くものである。教科担当と学年が意思疎通を図りやすい素地を形成していく必要がある。
第3学年部	指導方針	教科・コース・寮など、多くの分掌で一貫した全体指導を通して、生徒の自己肯定感を高める指導を行う。	担任団だけでなく、他分掌や保護者との協働によって指導に統一感を持たせ、生徒一人一人に合わせたタイミングで効果的にアドバイスを行うことで、生徒が自己理解を深めて自信をもって進路に向かうことができる体制作りを目指す。	B	B	(成果) ・担任団が団結し、スピード感を持って個々の生徒の抱える課題に向き合い、問題解決のために取り組むことができた。 ・進路指導部・生徒指導部と連携し、保護者の理解も得ながら進路指導・生活指導を進めることができた。 ・進路学習を通して生徒が自己理解を深めると共に、自己肯定感を高めて希望進路達成を成し遂げることができた。
		生徒が自信を持って卒業できる、大人としての資質を備えるための指導を行う。	他者に対する感謝の念を持ち、他者の立場に立って物事を見て考える事の大切さを様々な場面で説諭することで、人権意識を高めながら人を思いやることのできる人格形成につなげ、社会人として必要な資質を身に付けさせる。	B	B	(課題) ・「社会人として必要な資質」の定着を目標に学年を挙げて説諭等を行ったが、人権意識向上や人格形成に果たしてどこまで資することができたか疑問である。指導の難しい生徒への対応や対策については、大きな課題を残すことになった。 ・コースとの連携については、学科会議での情報共有などを含めて連携することができた。その反面、コース任せになってしまった側面もあり、指導分野に関する配分やバランスの詳細を綿密に打ち合わせる必要性を強く感じた。 ・コロナ禍とはいえ、最高学年となってからも退寮者や指導を要する生徒が後を絶たず、「全体として落ち着いた集団」としての印象を拭えなかった。全体指導と個人指導の両面から、いかに落ち着いた環境を創出できるかが課題として残った。
		生徒自身が進路意識を高め、多くの情報に触れることで未来の選択肢を増やす指導を行う。	進路に関する視野を広げ、進路選択の可能性を高めるために、生徒にとって有用な情報を担任団・各分掌間で共有・発信し、自己実現に向けてのモチベーションアップにつなげ、生徒自らが積極的にチャレンジし続けることのできる環境を整える。	C	C	

学校運営協議会による評価	<ul style="list-style-type: none"> ・通学費等の保護者負担軽減策として学校独自の奨学金制度等を考案できないか。 ・中学生の段階で農業を決断するのは難しい。将来の選択肢に拡がりを持ち、魅力を感じられる進路実績が必要 ・社会に出たときに役立つ寮生活の良さが中学生に伝わるのが大切 ・小学生が農業の大切さを学ぶ機会が少なくなった。英語教育やタブレットも大切だが、自然体験的な農業の良さを伝えれば、真の生きる力を育むことにつながる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・3年ぶりの農芸祭は賑わいもあり生徒もしっかり取り組んでいた。 ・時間を短縮した開催ではあったが地域にPRすることができていた。 ・小中学生の体験コーナーを多く実施していた。このような保護者・家族の学校に対する理解が得られる機会が大切である。 ・保護者アンケートの回答率が高まっている。質問項目も見直され、実効性のあるものになった。 ・寄宿舎について、中学生は入寮に対してプレッシャーを感じていることも考えられ、希望入寮制度を検討できないか。また、女子寮の設置が志願者の増加につながらないか。 ・将来的には食品加工や製菓などの学習内容を取り入れるのがよい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒数が少なくなっているが、生徒が希望するコースに所属できるよう取り組まれない。 ・昨年、肥料や飼料・燃料等の資材が高騰しているが、生徒の教育活動に影響がでないよう取り組んでいただきたい。 ・今後も授業アンケートの実施等により、授業改善に向け取り組んでいきたい。 ・高校を認知されていない方がまだまだおられるので、より情報発信に努めることが大切である。 ・学校で多く取り組む地域連携活動について、京都市内のホテルとコラボした連携活動を見ていると、「地域」というものの捉え方は広範囲であると感じられる。よい教育をしていると、それが社会に認められ、地域の力になっていくであろう。
--------------	---	---	--

次年度に向けた改善の方向性	<p>[管理職]</p> <p>(1)観点別評価やBYODの取組をより推進することで、授業改善を図り、生徒の学力向上に努める。(2)府立大学との連携を促進し、独自の農業専門教育モデル研究に努める。(3)あらゆる教育活動を通じたキャリア教育をより実践し、希望進路の実現を図るとともに、人権意識を高揚させる。(4)新分掌の役割を定着させ、生徒募集活動を充実させる。</p> <p>[事務部]</p> <p>(1)奨学金や各種保護制度また次年度からは学習端末についての補助等様々な制度があるため、その内容について理解しやすいようきめ細やかな対応を心掛ける。(2)学校運営費がさらに厳しくなる中でも、教育活動を主に考え効率的な予算執行に努める。</p> <p>[教務部]</p> <p>(1)観点別評価やBYODについて、実践例など情報を積極的に発信・共有し、本校にとって効果的な運用方法を検討する。(2)規律を保ち、安心できる授業環境が学びの土台となることを意識し、授業環境を整えていく。(3)早急に校内情報管理システムを整備するとともに、活用しやすいICT機器の配備を行う。(4)地域をはじめ広く情報発信を行い、農芸高校の魅力発信の手法を模索し続ける。</p>	<p>[生徒指導部]</p> <p>(1)生徒の規範意識の高揚、マナー指導 (2)生徒の特性を理解した効果的な指導方法の模索 (3)安全運転意識の向上と交通安全教室の継続 (4)部活動の活性化と生徒が主体的に活動する生徒会の行事計画</p> <p>[進路指導部]</p> <p>(1)学年当初に推薦に関するルール説明、担任、コース担当者、進路部の分担を決めておく。(2)第2回進路指導会議から、就職応募書類提出までの期間が短く、余裕を持たせたい。</p> <p>[保健部]</p> <p>(1)マスクの着脱等、場の状況に応じた行動が取れるよう、生徒に啓発を行っていく。(2)校内施設を教職員・生徒の両方の目で確認する機会を増やし、校内安全をいっそう充実させる。(3)特別な支援を要する生徒に対して、適切な時期に適切な支援を行える体制作りと関係各所との情報共有・連携を密に行う。</p> <p>[農場部]</p> <p>(1)事務部と連携し、引き続き実験実習費の確保に努める。(2)府連大会のフルエントリーを継続し、全国大会で入賞する指導を行う。(3)老朽化している施設・設備を計画的に更新する。特に環境創造科関連のもの。(4)観点別評価を含んだ評価表の作成、農業科目におけるタブレット端末の具体的な活用方法を研究する。</p> <p>[寮務部]</p> <p>(1)新型コロナウイルスが5類に引き下げられるに伴う寮日課の見直しや寮行事の企画・運営⇒年度当初に年間計画や寮日課について、分掌内だけでなく関係分掌や寮生会役員とも協議し、スムーズな運営が出来るよう調整を図る。(2)食事の改善⇒引き続き給食業務委託業者に食事の内容や生徒の要望を伝える機会を増やし、改善を求めていく。(3)施設設備の改修⇒寄宿舎棟の屋根のふき替え、壁面塗装が予定されている。その他にも学習室の機能回復を目指していく。</p>	<p>[第1学年部]</p> <p>(1)日々の生徒と向き合う中で、教科担当者が授業しやすい雰囲気作りを行う。(2)来年度以降についても基礎学力の定着のために7限目を実施する。(3)BYOD端末の利活用について効果的な方法を探索し続ける。</p> <p>[第2学年部]</p> <p>(1)説諭等を日常的に行いながら指導を継続するとともに、生徒間の関わりに関して、他者のことを考えながら自身が行動できるような取り組みを行う。(2)進路指導部、コース担当、その他関係分掌や教科と連携し、早め早めの進路指導を行う。</p> <p>[第3学年部]</p> <p>(1)全体指導を行う際、一度設定したラインを共有し、指導に温度差が出ないようにしていくために、連携体制の確認を行うことが重要である。(2)生徒の自己肯定感や自尊心を高め、自信を持って次の進路に踏み出せる取組を早い段階から計画し、LHR等を活用して実施していくことが大切と感じる。</p> <p>[人権教育]</p> <p>(1)府教育委員会「人権学習実践事例集(高等学校編Ⅱ)」(令和5(2023)年発行)や「人権学習資料集(高等学校編Ⅱ)」(平成31(2019)年発行)、人権教育担当の外部研修を活用した教職員研修会の実施及び深く効果的な人権学習の展開 (2)人権学習について、授業担当の指導力向上及び生徒の実態を考慮したクラス単位実施も含めた展開による生徒の人権意識の高揚と定着 (3)面接において違反質問をされた場合の生徒の対応について (4)外国につながる生徒の在留資格の確認と日本語能力の把握</p>
---------------	--	--	---